世界とつながる 教養

―よくなろうとする祈りと学び―

「いかに生きるか」という問いに応える、教養のちから。

「平成」と改元され、新しい時代への一歩を踏み出した1989年。
教養学部は、本学5つめの学部として、泉キャンパスに誕生しました。
学問横断的アプローチによって、豊かな知識と多角的な視点、
しなやかな思考力を養うことを教育目標に掲げ、
これまで9000人を超える卒業生を送り出してきました。
教養学部は来年から新学部に、そのスピリットを引き継ぎます。
学部長経験者の佐久間政広教授、現学部長の塚本信也両教授に、
改めて「教養とは何か」をお話しいただきましょう。

｜フィールドワークで集落に分け入り、歴史や文化に迫る試み。

佐久間：本日は気持ちの良い秋晴れとなりました。学生たちも休み時間には屋外でお茶を飲んだりおしゃべりに興じたり、思い思いに過ごしていますね。私たちも教養学部について語り合う機会をいただきました。塚本先生、本日はよろしくお願いいたします。まず初めに自己紹介に代えて、ご自身の専門分野についてお聞かせください。

塚本：専門は中国古典学です。シノロジーともいいます。どうしてこの分野を選んだか――別に大層な理由や高邁な理想があったわけではありません。40年近くも前の日本社会はある意味で今以上に「外国語イコール英語」がまかりとおっていたものの、へそまがりの私としては到底その波に乗れない。西方でなければ東方を、そうなると中国語しかなかった（笑）。実際、当時は中国に対する注目度もさほど高くなく、それが1980年代後半には、中国語をいくらか囓っただけで総合商社や大手メーカーから引く手あまたになるのですから、塞翁が馬というか、何とも不思議な感覚を抱きました。

英語はさすがに別格ながら、いわゆる第二外国語科目の履修者数は、政治や世情、流行などを色濃く反映します。日本と中国の間にトラブルが起こると、決まって翌年は中国語の履修希望者が激減しました。皆が学ばぬ今こそ学べ、一時の流行に左右されるな、とへそまがりらしく慣ったものです。現在は、中国語のほか、韓国朝鮮語が人気ですね。その音楽やドラマ、映画などのソフト・パワーが世界を席巻しているといって過言ではない。ややもすると遠くばかりを遥かに眺めていたけれど、灯台もと暗し、近くに目を注ぎ、耳を傾ける余裕が生まれてきたのでしょう。

佐久間：私は農村社会学が専門で、中山間地域やいわゆる限界集落と言われるような地域に足を運んで住民の方々のお話をうかがってものを考えてきました。教養学部では卒業研究（卒論）が必修です。それもあってゼミ生を連れて、県南部の集落で高齢者からライフヒストリーを聞く、といったフィールドワークを行ってきました。近隣関係が濃密なコミュニティに入るので、事前に役場などを通じて調査のお願いをするとか、段取りに気を使います。集落を訪問する段になって「挨拶する順番が違う」と怒られたこともありました（笑）。それでも若者が訪ねると本当に喜んでくれて、聞き上手な学生は長時間のヒアリングで大きな収穫を得て帰ってきます。

フィールドワークではいろんなことがありました。住人から必要以上に警戒された時があるのですが、少し前に集落の高齢者を狙った悪徳セールスがあったらしいのです。「また来た」と思われたようです。さまざまな情報が素早くめぐるのも農山村の特徴です。それをプライバシーがないと感じる人もいれば、危険を素早く察知できるので安心できると感じる人もいます。外からはうかがい知ることのできない地域の多様な姿を、学生はフィールドワークを通じて感得していると思います。

編集部注：写真撮影時のみマスクを外しています。座談会は新型コロナウイルス感染症対策を徹底したうえで行いました。